
夢ヲ歩ク

賽乃目祀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢ヲ歩ク

【Nコード】

N2738BA

【作者名】

賽乃目祀

【あらすじ】

夢は繋がる。

互いの思いに感応して。

少女・窓付きが、青年・くいつきの夢を歩いて感じとるのは……？

夢は繋がる（前書き）

前作とは文法が変わっています。
楽しんで頂けたら幸いです。

夢は繋がる

「先生、ピアノ弾いて」

三つ編みの少女が、言った。

「良いですよ。何を弾きましよう?」

先生と呼ばれた黒づくめの男性は、少女に聞いた。

「何でもいいよ」

「分かりました。では、窓付きさんの好きな曲を」

そう言くと、先生はゆったりとしたメロディを奏で始めた。

窓付きと呼ばれた少女は、部屋の中央のテーブルへ向かい、椅子に座った。

「窓付きってば、我が物顔ね。他人の家なのに」

そう言いながら、窓付きの向かいの椅子に座った白い肌の黒髪少女に、

「モノ江だって人の事言えないじゃん」

と、窓付きが突っ込みを入れる。

黒髪の少女・モノ江は、わざと聞こえないふりをした。

「あなたも、こちらへ来られてはいかがですか?」

ピアノを弾きながら、先生が部屋の入口に向かって声をかけた。
少しの間の後、

「……………いい」

と、声が返ってきた。

「そうですか」

先生はそれ以上何も言わず、静かなメロディを奏で続けた。
代わりに窓付きが喋る。

「何も無いけど、ゆっくりしてね」

するとまた、数秒の間を置いて、

「……………ああ」

とだけ返事が返ってきて、会話が終了してしまった。

先生の奏でるピアノの音色だけがしばらく部屋に響いたところで、
「しかし、あれよね。ほんと物好きよね」

唐突にモノ江が口を開いた。

それに窓付きが反応する。

「何が？」

「あなたじゃないわよ」

言つてモノ江は、今度は後ろを見て言った。

「あなたの事よ。くいつき」

そこにいたのは、青い髪と包帯が目立つ青年だった。

くいつきと呼ばれた青年は、黙つてモノ江を見た。

モノ江は気にせず続ける。

「毎日毎日飽きもせずに、この世界に来るんだもの。あなたにも、

あなたの世界があるんじゃないの？」

モノ江はどこか呆れたように言う。

世界とは、夢の中の世界の事である。

意味はそのまま、モノ江達がいるのは、窓付きの夢の世界。また、

モノ江や先生は窓付きの夢の世界の住人なのだ。

「普通なら、窓付き以外の人間がここに来る事なんて有り得ないの

よ？ましてやあなたたち、現実で会ったことすらないんでしょ？ま

すます有り得ないわ」

『あなたたち』の所で、窓付きとくいつきを交互に見ながらモノ江

は言った。

くいつきは何も答えない。

「まあでも、楽しいし良いんじゃないかな？」

空気に耐えかねた窓付きがそう言うと、モノ江は大きなため息を吐

いた。

「…もういいわ。真面目に言った私が馬鹿だった」

その言葉に、窓付きがムツとして言い返す。

「私だつて真面目に言ったよー！」

「はいはい」

「もー！」

「あなたは牛なの？」

「違うよっ！」

と、窓付きとモノ江が数回言葉を交わすと、急にピアノのメロディが止まった。

窓付きとモノ江が同時に先生を見ると、先生はピアノの上にある窓を見上げている。

「どうしたの先生？」

窓付きが近づいて聞くと、先生は、

「いえ…外の様子が、なんだかおかしくて……」

「外？」

言われて外を見ると、いつもは星空が見えるはずなのに、真っ暗になっている。

「さっきまでは、ちゃんと星が見えていたのに……」

先生が不思議そうに言う。

「出してみよっか」

窓付きが言うと、

「私も行くわ」

「……俺も行く」

モノ江とくいつきも名乗り出た。

「危険だと思ったら、すぐに戻ってきて下さいね」

「分かった！」

先生の言葉に元気よく返事を返すと、窓付きはゆっくりと部屋の扉を開いた。

夢は繋がる（後書き）

続きます。

この回は繋ぎの回で、次からがお話としては本編となります。

誰の夢？（前書き）

モノ江がよく喋ります。

誰の夢？

「ここは……………」

部屋を出た窓付き達が見たのは、

「学校…の、教室？」

薄暗く、どこか陰湿な空気が漂っているが、そこは確かに一般的な学校の教室に似た場所だった。

均等に机や椅子が並べられ、部屋の前後に黒板がある。

「おかしいわ…………部屋の外は、こんな場所じゃなかった」

モノ江はそう言うと、側にあつた机を掴み、

「んんっ……………」

動かそうと力を入れるが、机は微動だにしない。

「ダメね…全然動かないわ。固定されてるみたい」

窓付きも椅子を持ち上げようとしたが、同じように動かなかつたのか、諦めた。

今度は窓の外を確認する。くいつきが廊下側。窓付きとモノ江がその反対側を確かめる。

「何も見えないね」

窓付きが呟いた。

「そうね。真っ暗で確認のしようがないわ。…そっちはどう？」

モノ江がくいつきを振り返る。

「…………暗くて見えないけど、何かいる」

「何かあって？」

窓付きが聞き返すと、

「…黒くて、顔のそこだけ白くて、スライムっぽい」

「うえ、なにそれ」

それを聞いて、モノ江はあからさまに嫌そうな顔をした。

「暗くて見えないなら、電気つけちゃおうよ」

窓付きが教室の前にあつた蛍光灯のスイッチに触れようとした瞬間、
「…やめた方がいい」

パチッ。

くいつきが言ったのとはほぼ同時に、窓付きはスイッチを押して電気をつけた。

「…え？」

窓付きはぼかんとして、くいつきを見た。

「……来るぞ」

ぼつりと言つと、くいつきは窓付きの手を掴み、引き寄せた。

その瞬間、教室の扉が開き、黒い影のような化け物が入ってきた。

ぐにやぐにやと体をくねらせながら前進し、白い顔をキョロキョロさせて教室の中を見回す。

「いやあっ！なにこれ!？」

モノ江が悲鳴を上げる。

すると黒い化け物は、ぐるんと顔を回して、モノ江に向かって走ってきた。

「…部屋に戻るぞ」

言うが速いか、くいつきは窓付きを引つ張って部屋の入口に走った。

「モノ江！部屋に逃げて！」

窓付きは立ち竦んでいたモノ江に叫んだ。

「っ！」

入口に近かつたモノ江は、化け物に捕まる寸でのところで部屋に飛び込んだ。

窓付きもそれに続いて走り込み、最後にくいつきが入ると、素早く扉を閉めた。

入ってくる気配はない。

そこでようやく、窓付きとモノ江は安堵の息を吐いた。

「ど、どうしたんですか？」

「じゃあずつとここにいななくちゃいけないの…!?!」

「うーん……でも、慣れたら楽しいかもしれないよ?」

窓付きがいつもの気楽な発言をすると、モノ江はキツと睨んで言った。

「慣れるわけないじゃないあんな化け物!鳥人間の方がまだマシだわ!」

鳥人間とは、モノ江や先生と同じ夢の住人の事である。体は人間だが、鳥のような顔をしている為そう呼ばれている。

彼女(?)達は、窓付きを見ると追いかけて回すのだが、捕まって殺されたりするわけでもない。端から見れば鬼ごっこのようなものなのだ。

「あれは、ダメよ。本能が危険だって言ってるわ」
あれとは、黒い化け物の事だろう。

窓付きも、化け物が教室に入ってきた瞬間に感じた。
言い様のない恐怖。不安。

「……………」
一瞬、脳裏に化け物の姿が浮かび、窓付きはぶるぶると身震いをした。

「…じゃあどうするの?ずっとここにいるの?」

「わ、私に聞かないでよ……」

窓付きとモノ江が黙ると、途端に沈黙が訪れた。
やや重苦しい空気が流れる。と、

「…ちよつと良いですか?」

今まで黙り込んでいた先生が口を開いた。
全員が先生を見る。

「僕が思うに、ここは…くいつき君の夢の世界じゃないでしょうか?」

「!」

窓付きはハツとした。

確かに、初めてにしては化け物の対処も早かったし、そういえば電

気をつけると化け物が来る事も知っていたようだ。
くいつきを見ると、床を見つめたまま黙っている。

「そうなの？くいつき」

モノ江が詰め寄ると、くいつきは小さく溜め息をついて、

「……………ああ」

と、短く答えた。

「なら早く元の世界に帰してよ！あなたが私達をここに連れてきた
んでしょう？」

いつになく感情的になっているモノ江が言う。

くいつきはまた黙った。

「僕からもお願いします」

先生が言うと、くいつきは少しだけ眉を寄せた。

「……………知らない」

「え？」

「……………俺は知らない。あんた達を連れてきたのは、俺じゃない」
そして、最後に彼が呟いた言葉を、窓付きは聞き逃さなかった。
その時の、どこか苦し気な表情も。

「……………こんな所に連れてくる気なんて、なかった」

誰の夢？（後書き）

次話は新たなキャラクター（オリジナル）が登場します。

予定です。

夢の住人（前書き）

夢を歩く回です。

今回は窓付きがよく喋ります。

夢の住人

「みんな準備できたー?」

「あら、先生も来るの?」

「はい、皆さんに何かあつたら困るので」

「先生がいれば百人力だね!」

「そうかしら?あ、でもそうね。化け物を撒くための罠にはなりそう」

「あはは…。いえ、僕も逃げますよ?」

窓付き、モノ江、先生がいつもの調子で会話をする。「忘れ物ないよね。じゃあ行こっか!」

言つて、窓付きは部屋の扉を開いた。

「お待たせ!くいつき!」

部屋の外で待つていたくいつきに、窓付きが声をかける。

「……本当に行くのか?」

くいつきがどこか嫌そうに聞く。

「行くよ?だつてせっかくくいつきの夢と繋がれたんだもん!探検しなくちゃ」

窓付きは楽しそうに答えて、にこにこ笑つ。

遅れてモノ江と先生が出てくると、くいつきは諦めたようにため息を吐いた。

そして、

「………そんな楽しいものなんて、ないのに」
と、誰にも聞こえない声で呟いた。

「………ほんとうに行くぞ」

「うん!」

窓付きが元気良く返事をする。

小さく息をつくくと、くいつきは普通に教室の扉を開いた。と、

「きゃああ!?!」

突然モノ江が悲鳴をあげた。

「!?!」

窓付きも先生も驚いて目を見張る。

扉を開けた先の薄暗闇に、ぽつんと少女が立っていたのだ。

少女は何故か頭に花と芽を生やし、意味もなく微笑を浮かべている。

「……………」

少女の黒目がちな瞳が、窓付き達を捉える。

すると、

「……………くーちゃん!」

微笑から満面の笑みに変わった少女が駆け寄ってきて、くいつきに抱きついた。

「え…………?」

窓付き達が呆然とその光景を見つめる中、

「……………いい加減にしろよ」

やや怒気を含めた口調でくいつきが言うまで、ずっと少女は離れなかった。

「はじめまして。わたし、はな子っていいいます。この世界…くーちゃんの夢の住人です」

一度教室の中へ入って落ち着くことになり、少女が自己紹介をする。

「くーちゃんっていうのは?」

「あ、彼…くいつき君の事だよ」

「はな子って本名なの?」

「ううん、くーちゃんがつけてくれたの」

窓付きの質問に、はな子が軽快に答えていく。

化け物のように恐怖などは微塵も感じない。むしろ、モノ江や先生と近い感じがする。

窓付きは短時間の内に、すっかりはな子と打ち解けた。

「うふふっ、窓ちゃんって面白いね」

「はな子ちゃんも楽しいよ！」

「……今更な気もするけど、この世界の事を簡単に説明しとく」
はな子と窓付き達が仲良くなったところで、くいつきが立ち上がり
黒板に何か書き始めた。

「……これが、この世界の大概かな図」

そこには、校舎の見取り図が細かく書かれていた。

「うわあ……よく覚えてるわね、こんな細かいの」

モノ江が驚いたように言う。

「もつと大雑把な性格かと思ってたわ」

「……悪かったな」

くいつきが少し口を尖らせて言うと、

「……ん？」

見取り図を眺めていた先生が、首を傾げた。

「……どうした、先生？」

「この図、所々空白がありますが……」

「……ああ、入った事がない場所は、空白にしてる」
くいつきが説明をし始める。

「……俺達が今いる場所は、南校舎一階の1Aの教室。この南校舎は
三階まであって、どの階も教室は三つある」

見取り図には、

『1A』、

『1B』、

『2A』、

『2B』、

『2C』、

『3A』、

『3B』、

『3C』が書かれている。

「あれ？1Cは？」

窓付きが聞くと、

「その教室は開かないの」

くいつきの代わりに、はな子が答えた。

「どうして？」

「どうしてかな？うふふ、わたしも分からないの」

微笑を浮かべて、はな子は言った。

「この、北校舎というのは？」

「北校舎は、南校舎の反対にある。北校舎に行くには、この渡り廊下を通るしかない」

先生の質問に答えながら、くいつきは北校舎と南校舎の間にある一本の道を差した。

「北校舎は四階まであって、一番上は屋上になってる。行ける場所は全部で九つ」

北校舎の見取り図には、

一階に『職員室』、

『校長室』、

『更衣室』。

二階に『コンピュータ室』、

『購買』。

三階に『音楽室』、

『美術室』。

四階に『生徒会室』。

一番上に『屋上』と書かれている。

「すごいわね、こんなにたくさん」

モノ江が呟くように言う。

「ねえ、はな子ちゃん以外にも住人っているの？」

不意に窓付きが、はな子に訊ねた。

「いるよ？たくさん」

「そっか…」

言って数秒黙ると、窓付きはパツと顔を上げ、

「ねえくいつき！私、他の夢の住人の人達に会いたい！」

「……はあ？」

くいつきが呆れたような声を出す。

「……何で。こいつだけで十分だろ」

言いながらくいつきは、はな子を差した。

「はな子ちゃん以外にも会いたいのに！くいつきだって、モノ江と先生に会ってるでしょ？せめてあと一人紹介してよ」

「……………」

あからさまに嫌そうな顔をしたくいつきだったが、

「会いたいよーお話したいよー仲良くなりたいたいよー！」

頑なに駄々を捏ねる窓付きに、しぶしぶ折れた。

「やったっ！」

窓付きは嬉しそうに笑う。

「それで、どこへ行くの？」

モノ江が聞く。

「……屋上を目指す。その間に、大体の住人には会える」

扉に手をかけながら、くいつきは答えた。

「楽しみだなー！ね、モノ江、先生！」

「まあ、そうね」

「はい」

「……………うふふ」

はな子はそれを見ながら、静かに微笑んだ。

目的地である屋上に着くまで、窓付き達は多くの住人達に出会った。

顔に口しかない子供や、頭と腕が繋がった少年。窓の外をじっと見ている三つ編みの少女に、ただ静かにこちらを見つめる女性。

廊下に落書きをしている一つ目の子。機器に囲まれた部屋にいた双子など。

窓付きが言葉をかけても答えない者はいたが、ほとんどは歓迎の言葉や笑顔を返した。

「くいつきの知り合い？」

「友達だよ！」

「そうか。ようこそ、この世界へ」

住人は皆温かく親しみやすかったが、

「それじゃ、サヨナラ」

それぞれの言葉が帯びた雰囲気は、どれも深い悲哀に満ちていた。

特に、屋上にいた足の無い青年は、

「……………」

窓付きは、かける言葉が見つからなかった。

彼の纏う悲しみが痛いほど窓付きに突き刺さる。

「…そろそろ、戻りましょう」

先生がそう言わなければ、恐らく窓付きは泣き出していた。

教室へ帰るまでの間、窓付きはずっと思い返していた。

この世界の事。

住人達の事。

そして、この夢を見ている人物の事。

前を歩く青年の背中が、窓付きには、この世界の住人によく似ているように見えた。

夢の住人（後書き）

説明が無駄に長くなって分かりにくくなってしまいました。
申し訳ありません。

そして恐らく次回が最終話になるかと思えます。
どうぞ最後までお付き合い下さい。

終わる夢の先（前書き）

最終話です。

どうか彼の夢の最後を、見届けてやって下さい。

終わる夢の先

「……帰った方がいい」

くいつきが、ぽつりと言った。

「え？」

窓付きは思わず聞き返した。

「なんで？」

「……」

何も言わず、くいつきはただ歩いた。

「……」

モノ江と先生は、そつと後ろを振り返った。

来た道は、もう見えなくなっていた。

「？」

窓付きが首を傾げる。

部屋の扉がある1Aの教室を通り過ぎ、くいつきは歩き続けている。

「ねえくいつき、どこ行くの？部屋はこの中だよ？」

「……」

くいつきは答えない。

「……ねえ！」

窓付きが叫んでも、声は虚しく廊下に響き渡るだけだった。

「行かないの？窓付きちゃん」

後ろに立っていたはな子が、微笑を浮かべながら言った。

「だって、部屋に帰るんじゃない……」

「違うよ。窓付きちゃん達の世界に帰るんでしょう？」

「……??？」

困惑の表情で窓付きは固まる。

はな子の言っている言葉の意味が分からない。

「…行ってみましようよ、窓付き」

モノ江が背中を優しく押す。

まとまらない気持ちを抱えたまま、窓付き達はくいつきの後を追った。

しかし、はな子はその場から動こうとしなかった。

窓付き達は気付かないまま、先へ進んで行く。

「……………うふふ」

三つの背中を見送って小さく微笑むと、

「サヨナラ」

その姿は、闇に溶けるように消え失せた。

長い廊下を進み、窓付き達は扉の前で立っているくいつきを見つけた。

扉には、『1C』と書かれている。

「くいつき」

窓付きが名前を呼ぶと、くいつきはゆっくり振り向いた。

「……………ここから」

スツと扉を示して言う。

「……………元の世界に行ける」

「…その扉は、開かないんじゃないの？」

モノ江が怪訝そうに言った。

確かに最初、1Cの教室だけ開かないと、くいつきは言っていた。

「……………ああ。言った」

と、

「…俺には、開けられないけど」

窓付きを見た。

「私…？」

くいつきは扉の前から下がる。
開ける、という意味だろう。

「……………」
窓付きは恐る恐る扉に手をかけた。

ガチャツ。と、

「！」
扉が、開いた。

扉の先は暗く、長い一本道が延々と続いている。

「……………はな子は……………」

扉の先に意識をとられていた窓付きは、くいつきの声でハツとした。

「え？はな子ちゃんなら一緒に……………」
後ろを振り返る。

「……………いな……………」

そこには、モノ江と先生しかない。

「さっきまで一緒に……………」

戸惑う窓付きの言葉を聞いて、くいつきは静かに目を細めた。

「……………そうか。もう、逝ったのか……………」

「え？いったって……………どう……………」

そこまで窓付きが言いかけて、息を飲んだ。

「く、いつき……………」

「ちよつと……………あなた……………」

「身体が……………」

モノ江と先生も驚いたような声を上げた。

くいつきの身体が、徐々に淡く色褪せていく。

「……………早く行けよ。この世界も、もう終わる……………」

「何で？そんな……………身体が……………どう……………な……………って……………」

上手く喋れない。

混乱する頭で、窓付きは必死に言葉を探す。

「終わるって…何…」

くいつきは何も答えない。

「きゃああ!？」

突然、モノ江が悲鳴を上げる。

身体が闇に溶けて行く。

「モノ江!？」

「窓付き…!」

窓付きが伸ばした手はモノ江に触れることなく、宙をきった。

「窓付きさん…!」

先生の身体も、闇に飲まれていく。

「先生!」

「……………!」

先生は何か言おうとしたが、それが窓付きに届く事はなかった。

「……………!」

闇が迫ってくる。

「……………早く。お前が戻れば、二人も大丈夫だ」

くいつきが急かす。

その声も、もうぼやけて聞こえる。

「これが…夢の最後なの?」

泣きそうな顔で、窓付きが聞く。

「…俺の選んだ終わりが、これだった。それだけだ」

くいつきは言った。

「……………お前の夢は、こんな最後を迎えるな」

そして、ズボンのポケットから何かを取り出すと、窓付きの手に握らせた。

「?」

「……………土産。夢と一緒に歩いてくれて、ありがとう」
くいつきは、ゆっくり扉を閉める。

「……覚えてなくていいよ。忘れてくれていい」

「……覚えてるよ。忘れない」

窓付きが言うと、くいつきはふっと笑った。
ように見えた。

「サヨナラ。窓付き」

「サヨナラ。くいつき」

バタンツ。

「……ちょっと！窓付き、聞いているの？」

モノ江が顔を覗き込む。

「えっ？あ、ごめん。何だっけ？」

ぼんやりしていた窓付きは、慌てて聞いた。

「何だっけ？じゃないわよ。ちゃんと人の話聞きなさいよ！」

「う、ごめんってば」

すっかりモノ江は怒ってしまったようで、窓付きが何度謝っても聞かぬフリをしている。

「何か考え事ですか？」

ピアノを弾いている先生も、会話に加わる。

「最近多いですね」

「考え事というか……」

窓付きは少し言葉を濁らせて、

「何か、大切な事を忘れてる気がするの」

「もうボケ始めたの？大変ね」

すかさずモノ江が毒を吐く。

「違うよっ！」

「まあまあ、落ち着いて」

先生がなだめに入ったのと同時に、時計が時刻を知らせる鐘を鳴らした。

「あつ、いけない！お水あげなきゃ」

窓付きは立ち上がると、窓辺にある植木鉢に水やりを始めた。

それを見ながら、モノ江と先生が小さな声で話す。

「どうしたのかしら。急に花を育て始めて」

「あの日からですよ。気が付いたら、僕らがこの部屋で倒れてた日」

「ああ、そうだったわね。確かその時窓付きが握ってたわよね、変

な種。あれかしら？」

二人はもう一度窓付きを見た。

楽し気に鼻歌を歌っている。

「……まあ、窓付きが良いなら、私も良いけど」

「ですね」

そう言うと、二人は小さく笑った。

「……ふふっ、早く咲かないかなー！」

植木鉢から顔を出した芽に、窓付きは心躍らせた。

終わる夢の先（後書き）

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。

世界の隅っこで起きた奇跡に、一人の青年の運命を乗せて、少女に全てを託しました。

拙い文章で読むのに大変面倒をかけたことでしょうか、本当に申し訳ありません。

次のお話を綴る時には、もう少しまとめた内容になるよう精進致します。

『夢ヲ歩く』、全4話。これにて完結となります。

本当にありがとうございました。

願わくば、これを読んだ皆様にも、奇跡が起きますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738ba/>

夢ヲ歩ク

2012年1月14日08時46分発行